

マレー人元留学生による勧誘行動の特徴と課題

—コミュニケーション言語能力の観点から—

稗田奈津江（筑波大学）

要 旨

本稿の目的は、マレー人元留学生（MNS）による勧誘行動をコミュニケーション言語能力の観点から総合的に分析を行い、それらの特徴と課題を明らかにすることである。本研究では、SNSのテキストチャットを用いて、勧誘のロールプレイを行った。そして、言語構造的な能力、社会言語能力、語用能力の観点から、日本語母語話者（JNS）とMNSを比較した。分析の結果、MNSは接触場面において、友人とのやりとりに必要な社会言語能力と語用能力を身につけており、相手に適切な配慮を示しつつ、勧誘の主目的を達成できていることがわかった。一方で、言語構造的な能力の面からはローカルエラーが散見されたが、それらが修正されることはなかった。これらにより、「ニーズの充足」がなされた場合、それが「訂正フィードバックの欠如」という外的要因や、「注意不足」「エラーの不検出」等の内的要因を連動的に引き起こす可能性があることが示唆された。

【キーワード】 コミュニケーション言語能力 マレー人元留学生 勧誘行動 SNS
第二言語としての日本語（JSL）

1. はじめに

国際交流基金が2010年に「JF 日本語教育スタンダード」（以下JFスタンダード）のウェブサイトを開設したり、文化庁が2021年に「日本語教育の参照枠」をとりまとめたりするなど、今日の日本語教育においては、日本語の学習、教授、評価のための枠組みがより統一的に整えられてきている。それらは、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）を参考にしており、「コミュニケーション言語活動」（受容、産出など）を支える力として、「コミュニケーション言語能力」（後掲3.2の表1参照）を打ち出している。コミュニケーション言語能力は複数の下位能力から構成されており、それらが相互的に作用することで、コミュニケーション言語活動が成立していると言えよう。

しかしながら、第二言語としての日本語（以下JSL）使用に関する従来の研究では、文法や音声、語用論的側面など、ある特定の能力に焦点が当てられることが多かった。コミュニケーション言語能力を構成する複数の観点から、より包括的かつ詳細にJSL使用を分析し、複数の能力の相互作用を考察した研究は、管見の限り見当たらない。

また、「*大きいのかばん」等、文法に関しては正誤がより明確である一方、語用論的側面（例：断りの際に「ダメです」と言う）に関しては、状況によってメッセージ受信者の受容度が変化しやすい。そのため、語用論的な面においては特に、産出文のみに着目するのではなく、メッセージ受信者の解釈や評価も勘案して考察を行う必要があると考える。

そして、今後は、日本語母語話者（以下JNS）と日本語非母語話者（以下JNNS）の相違点を追究すると同時に、コミュニケーション言語能力の総合的な向上における課題を明らかにしていくことが求められよう。

したがって、本稿では、マレー人元留学生（以下MNS）の勧誘行動に焦点を当て、コミュニケーション言語能力の観点から、その特徴と課題を明らかにする。その際に母語場面（JNS 同士及びMNS 同士のやりとり）と接触場面（JNSとMNS 間のやりとり）の比較を行う。本研究が勧誘に着目したのは、相手のネガティブ・フェイス¹⁾を侵害する行為の典型的な例の1つだからである（熊谷 2013）。また、MNSに着目したのは、マレーシア政府の掲げる東方政策の下、今日までに大勢の留学生が日本に送り出されており、MNSのJSLについても見識を深める必要があると考えたからである。

2. 先行研究

本章では、JNNSの勧誘行動における開始部と勧誘部に着目した先行研究を概観し、それらの知見と課題をまとめる。なお、本稿では、意味公式（発話の分析に使用される意味的なまとまりの単位）を、{ } 内に表示する。

長谷川（2002）は、コーパスの分析を行い、JNNSはJNSよりも勧誘先行語句（「ひまがあるか」「都合はどうか」などを尋ねる発話）を多用する傾向があること、また、JNNSの大半が、「～ましょう」「～ましょうか」といった定型表現を用いて、勧誘の意向を直接的に伝えることに終始していたことを明らかにしている。

東條（2009）は、ロールプレイを行い、JNNSの発話に対するJNSの評価も確認している。そして、中級者と上級者の双方に、配慮表現がない、勧誘部の勧誘表現が直接的すぎるといった社会文化的逸脱が見られ、それらに対しては、留学生との接触が比較的多いJNSからも否定的な評価がなされたことを報告している。

上述の2つの研究は、事例を通してJNNSの特徴を記述しているが、対象者の母語や日本語レベル、勧誘内容などは統一されておらず、統計的な分析もなされていない。

続いて、鎖（2012）と李（2019）はいずれも、JNSと中国人JNNS（上級日本語学習者）を対象に、友人同士の役割で、対面でのロールプレイを行っている。なお、前者はパーティー参加を、後者は買い物とカラオケ参加を、勧誘内容に設定している。

鎖（2012）は、JNSは先行部で{名前}をあまり用いないが、JNNSには多いことを明らかにしている。また、JNNSは、{都合伺い}をすることなく、すぐに{話題提示}

や「共同行為要求」を始める傾向があり、JNSには唐突に感じられると指摘している。

そして、李（2019）は、JNSはJNSよりも先行話段の使用が少ないこと、また、誘いに関する情報共有の段階が遅いことを見出している。そして、相手の都合を伺わずに誘いを行うことや、誘うきっかけとなった情報を承諾後にしか提示しないことは、承諾の成功率を低下させる恐れがあると考察している。

上記2つの研究は、調査対象者の属性を統制し、語用能力に着目したものであるが、聞き手の評価については分析しておらず、他のコミュニケーション言語能力との関連性にも触れていない。また、MNSを対象とした勧誘談話における開始部及び勧誘部の先行研究も、管見の限り見当たらない。

よって、本稿では、MNSによるJSL使用に対して、コミュニケーション言語能力の観点から分析を行う。本研究で設定する研究課題は以下の2つである。研究課題1は「母語場面において、JNSとMNSの勧誘行動はどのように異なるか」、研究課題2は「接触場面において、MNSの勧誘行動にはどのような特徴があるか」である。これらにより、JSL使用における母語の影響や特有の現象が明らかになると期待できる。

3. 研究方法

3.1 データの収集方法

本稿で用いるデータの収集作業は、2019年の3月から5月にかけて、マレーシアで行われた。本研究では、図1のようなロールカードを使用し、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）のテキストチャットを用いたロールプレイを行った。

図1 ロールカード（日本語版）

<p>[A] Bさんはあなたの友達です。 あなたは、<u>今度の日曜日のホームパーティーにBさんを誘おう</u>と思います。 Bさんにスマホでメッセージを送ってください。</p>
<p>[B] Aさんはあなたの友達です。 あなたは、Aさんに<u>パーティーに誘われます</u>。 しかし、その日は、<u>ほかの予定が入っています</u>。 Aさんからのメッセージに返信してください。</p>

本研究で用いたSNSは、今日の若年層における主流のコミュニケーションツールを反映しているほか、文字起こしの作業負担がない、表情などの非言語メッセージが視覚的に記録されるという利点がある。本研究では、調査協力者が使い慣れているアプリを使用することを重視し、JNSの母語場面と接触場面は、LINEを用いて日本語で実施されたが、MNSの母語場面は、WhatsAppを用いてマレー語で実施された。

本研究の調査協力者は、JNSとMNS各20名である。性別や年齢による影響を最小限にするため、対象者は20代後半から30代の女性に限定した。また、場面設定の真

正性を高めるために、JNSを含め、マレーシア在住者のみを対象とした。MNS 調査協力者は全員、日本への元マレーシア政府国費留学生である。MNSの日本滞在歴は、3年以上5年未満が25%、5年以上が75%であった。また、日本語能力試験の結果は、N1（旧1級）合格が50%、N2（旧2級）合格が45%、未受験が5%であった²⁾。

調査協力者は、ランダムに組み合わせられた相手とペアになり、ロールプレイ上で友人同士を演じた。そして、母語場面と接触場面の双方で、勧誘者と被勧誘者の役をそれぞれ1回ずつ、計4回行った³⁾。ロールプレイ終了後には、半構造化インタビューを行い、「違和感や不快感があったところ」や「気をつけたところ」を中心に聞き取りを行った。これらの実施にあたっては、調査協力者に対して事前に趣旨説明を行い、調査協力承諾書の提出をお願いした。

3.2 データの分析方法

本研究では、3つの能力の観点からMNSによるJSL使用を分析する。表1は、JFスタンダードにおける記述を表に置き換えたものである（国際交流基金 2017 p.8）⁴⁾。

表1 コミュニケーション言語能力の内訳

言語構造的能力	語彙、文法、発音、文字、表記などに関する能力
社会言語能力	相手との関係や場面に応じて、いろいろなルールを守って言語を適切に使用する能力
語用能力	ディスコース（談話）を組み立てたりコントロールしたりする能力 コミュニケーションの中での言語使用の役割や目的（例：事実を報告する、説得するなど）を理解したうえで適切に使用できる能力

本研究では、中垣（2015 p.24）の枠組みに従い、収集した談話データを開始部、勧誘部、断り部、終結部の各構造部に分けた。その後、開始部と勧誘部で勧誘者が用いた発話に意味公式を当てはめていった⁵⁾。

続いて、コミュニケーション言語能力それぞれの観点から、分析の着眼点を示していく。言語構造的能力の観点からは、最も中心的な文法能力に焦点を当て、主要な意味公式である「話題提示」と「共同行為要求」の言語形式に着目した。「話題提示」では接続助詞を、「共同行為要求」では用法（「意向」「勧誘」「可能」等）（原沢 2010 p.170）を分析対象とした。社会言語能力の観点からは、三牧（2002）を参考に、文末と語における待遇レベルシフト⁶⁾に着目した。そして、語用能力の観点からは、言語使用の役割や目的を理解したうえで適切に使用できる能力を測るため、各意味公式の使用数、及び、意味公式の一人平均使用数に着目した。加えて、本稿ではSNSに特徴的なスタンプや絵文字等の非言語情報も語用能力の下位概念とみなし、相手への働きかけが顕著な「共同行為要求」における「文末絵記号類」（稗田 2022）の使用数も別途分析した⁷⁾。

表2は、本研究で用いた意味公式の一覧である。意味公式の分類にあたっては、鄭(2009)と中垣(2015)を参考にし、本研究のデータに合わせて、筆者が加筆・修正した。マレー語による発話は筆者が和訳し、本稿では斜体で表示した。

表2 開始部と勧誘部における意味公式の一覧

	意味公式	意味機能	発話例
開始部	名前	相手の名前を呼ぶ	花子／花子ちゃん
	挨拶	挨拶をする	こんにちは／久しぶり
	近況伺い	最近の様子について伺う	元気？／元気にしてる？
	近況報告	最近の様子について報告する	私も元気だよ
	状況伺い	連絡時の様子について伺う	今忙しい？／今何してる？
	連絡詫び	連絡による迷惑について詫びる	夜遅くにごめん／邪魔してごめん
	周辺話題	勧誘とは直接関係のない話をする	何の番組？／明日も仕事？
勧誘部	注目要求	相手の注意を喚起する	ねえねえ／あのね
	前置き	本題に入るまえの前置きを表明する	ちょっと聞きたいんだけど
	自分の非	連絡が遅かったという非を表明する	突然だけど／急かな
	都合伺い	勧誘したい日時の都合を伺う	今週日曜日空いてる？
	明示的誘い	連絡の主目的を明示的に表明する	お誘いです／お誘いがある！
	話題提示	主目的の話題を提示する	ホームパーティーするんだけど
	負担軽減	心理的負担を軽減する	よかったら／よければ
	共同行為要求	相手の行為を促す	どう？／来ない？／来れそう？
	再共同行為要求	再度、相手の行為を促す	来て～／どうかな？
	情報提供	勧誘内容に関する情報を提供する	友達5人くらい来る予定／13時から
	恩恵	勧誘受諾に対する恩恵を表明する	来てくれたらうれしい
	その他	上記以外	ありがとう／うん、そう／よかった

コーディング例は、以下のとおりである。「○○、{名前} 元気？ {近況伺い} 今度の日曜にうちでホームパーティーやることになったんだけど、{話題提示} 来れたら {負担軽減} 来ない？ ☆ {共同行為要求}」。

本稿では各意味公式における言及の有無を重視し、延べ数ではなく異なり数をカウントした。そして、統計的分析の際には、有意水準5%でフィッシャーの直接確率法の両側検定⁸⁾、及び、Welchの t 検定の両側検定を行った。

さらに、本稿では、質的データも適宜参照した。事後インタビューにより得られたデータは、発話に対するJNSの受容度を確かめるのに用いた。そして、談話の質的データは、事例を具体的に説明するのに用いた。

4. 分析結果

事後インタビューの結果、開始部と勧誘部におけるMNSの言語行動に対して不快感を示すJNSは皆無であったことから、以下に提示する言語行動はすべて、JNSの許容範囲内に収まっていたものである。

4.1 言語構造的な能力（文法能力）の観点から

まず、言語構造的な能力のうち、文法能力の観点から分析を行う。表3は、{話題提示} に用いられた接続助詞の使用数を、表4は、{共同行為要求} における用法の使用数を、JNSとMNSで比較した結果である。なお、マレー語については、日本語の表現と完全に一致するとは限らないため、最も近いものを選び、括弧内に提示した。

表3 {話題提示} における接続助詞の使用数

接続助詞	母語場面		接触場面	
	JNS	MNS	JNS	MNS
～けど	12	(1)	12	5
～て	1		1	4
～から	0		3	0
～ので	0		0	5
不使用	6	(10)	3	2
合計	19	11	19	16

表4 {共同行為要求} における用法の使用数

用法	母語場面		接触場面	
	JNS	MNS	JNS	MNS
意向（どう？）	3		3	1
勧誘（来ない？）	8		8	0
可能（来れる？）	2	(1)	1	3
依頼（来て）	1	(1)	1	7
願望（来てほしい）	2	(14)	5	5
合計	16	16	18	16

表3を見ると、母語場面と接触場面の双方において、JNSは接続助詞の「～けど」を最も多く用いていることがわかる。JNSの母語場面においては、「～んやけど」や「～んですが」のバリエーションが見られたが、接触場面では例外なく、「～んだけど」という形式が用いられており、JNSの典型的な表現となっていた。

マレー語では、{話題提示} に接続助詞を用いて後文とつなぐという用法はなく、従属節にコンマを用いた1件を除き、すべてが単文となっていた。接触場面において、MNSは「～けど」以外の言語形式をJNSよりも多く用いていた。JNSとMNSにおける「～けど」の使用数には有意傾向が見られたほか ($p=.092$)、MNSの言語形式には文法的な誤用が散見された（表5参照）。

次に、表4を見る。JNSは、母語場面と接触場面の双方において「来ない？」という勧誘表現を最も多く用いており、典型的な表現となっていた。

マレー語では、「Nak jemput awak dtg rumah」（あなたをうちに招待したい）のように、「願望」に相当する「nak」と、勧誘を表す動詞「ajak/jemput」（誘う／招待する）をいっしょに用いるのが典型的となっていた。JNSによる「願望」は、2件とも「来てほしい」であり、相手の行為（来る）に言及しているが、MNSは自分の行為（誘う）に言及している点において、両者の規範は異なっていると言えよう。

接触場面においてもMNSはJNSとは異なり、「依頼」の「来て」を最も多く用いており、JNSとの間に有意差が見られた ($p=.015$)。しかも、7件中5件が、「来てください」のように「ください」を添えていた。「～てください」を用いたJNSは皆無であったが、この発話に対して不快感を表明するJNSはいなかった。

表5は、MNSが接触場面で用いた「話題提示」の一覧である。本稿では、接続部分の誤用に限定し、非文法的な文には「*」、やや不自然な文には「?」を、文頭に付した。

表5 接触場面でMNSが用いた「話題提示」の表現

接続助詞	発話例
～けど	(ア) ?Partyやる予定だけど、 (イ) * 今週の日曜日に、子供のバースデーパーティーをやってるんだけど、 (ウ) * 家に母の誕生日パーティーをやる予定けど。 (エ) * 今週の日曜だけど、娘のバースデーパーティー <u>上げるだけ</u> で、 (オ) * 今度の日曜日、パーティを <u>開きたいだけ</u> で、
～て	(カ) * 今度の日曜House Warming Partyを <u>しょ</u> と思って (キ) 息子のお誕生日会をやると思って (ク) ちょっと家でホームパーティーを開こうと思って。 (ケ) 子供の誕生日パーティーをやると思って、
～ので	(コ) ホームパーティーするので、 (サ) 今度の日曜日にパーティをするので (シ) 今度の日曜日、娘の誕生日パーティーをやる予定なので (ス) 今度の日曜日子供のバースデーパーティしたいので、 (セ) * 今度の日曜日にお家で長女の誕生日会を <u>やる</u> ので、
不使用	(ソ) * 今週末バースデーパーティ <u>あげたい</u> よ。 (タ) 今度の日曜日にさ、ホームパーティーする予定なのよ。

表5を見ると、接続助詞「～けど」の活用に、誤用が頻発していることがわかる(下線部参照)。また、例文の(ア)においては、事情説明の「んだ」が含まれていない点において、やはりJNSの典型的な用法とは異なっている。翻って、「～けど」以外の接続助詞を用いた発話文においては、活用の誤用は少なかった。なお、これらの誤用に対して、MNSが言い直したり、JNSが訂正フィードバックをしたりすることは一切見られなかったが、やりとりは滞ることなく、スムーズに展開していた。

4.2 社会言語能力の観点から

次に、社会言語能力の観点に着目する。表6は、文末における基本的待遇レベル(特定の談話において相手に対して設定する基本となる待遇レベル)の選択数を、JNSとMNSの2群間で比較した結果である。また、表7は、待遇レベルアップシフト(より丁寧な表現を用いること)が行われた件数を比較した結果である。なお、マレー語には丁寧体と普通体の区別がないため、MNSの母語場面はカウントしていない。

本研究では対人関係を「友人同士」(親疎関係=親、上下関係=同等)に設定しており、基本的待遇レベルは「普通体」となっていた。JNSの1名のみが、母語場面と接触場面の双方において、個人のストラテジーとして「丁寧体」を選択していた。丁寧体を基本としたJNSは、同時に、普通体を混在させたり、絵文字を添えたりするな

表6 基本的待遇レベルの選択数

待遇レベル	母語場面		接触場面	
	JNS	MNS	JNS	MNS
丁寧体	1	-	1	0
普通体	19	-	19	20
合計	20	-	20	20

表7 待遇レベルアップシフトの件数

待遇レベル シフト	母語場面		接触場面	
	JNS	MNS	JNS	MNS
文末 語	2	-	2	6
	2	-	1	0
合計	4	-	3	6

として、友人に対する親しみも表現していた。

次に、待遇レベルシフトの観点から見る。母語場面では、JNSの2名に文末のシフト（例：いかがですか？）、JNSの2名に語のシフト（例：ご予約）が見られた。接触場面では、JNSの2名に文末のシフト（例：お誘いです）、JNSの1名に語のシフト（例：ご都合）、MNSの6名に文末のシフト（例：来てください）が見られた。いずれの待遇レベルシフトも、相手への働きかけの実施やその予告として用いられており、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能していたと言えよう。

4.3 語用能力の観点から

次に、語用能力の観点から、意味公式の使用数に関する分析を行う。表8は、各意味公式の使用数を、JNSとMNSの2群間で比較した結果を示している。

まず、母語場面について見ると、4つの意味公式において2群間に有意差があることがわかった。これらのうち、{名前} {状況伺い} {前置き} の3つにおいてはMNSがJNSより有意に多く用いていたが、{話題提示} はその逆であった。

{名前} は、MNSの全員が用いており、必須となっていた。{名前} の使用には、親密度を高めるポジティブ・ポライトネスとしての役割がある（鎖 2012）。また、SNSの開始部における {名前} には、宛名としての役割もあると考えられ、JNSの6割以上が {名前} を使用した点は、口頭でのロールプレイを行った鎖（2012）の結果とは異なっている。そのほか、敬語が存在しないマレー語では、{名前} の使用を通して、立場の認識に対するわきまえが示されていると思われる。

{状況伺い} の使用は、MNSの半数以上に見られたが、JNSには皆無であった。MNSには、{状況伺い} で得られた情報からさらに会話を発展させる例も見られたが（例：「今テレビ見てる」という回答に対して、「何の番組？」と質問を重ねる）、これは、稗田（2023a）と同様に、詳細な情報共有を通して親愛の情を深めるためだと思われる。また、MNSは短いメッセージを頻繁に送る「チャット形式」でのやりとりを好む傾向があるため（稗田 2022）、連絡時における相手の状況を尋ね、同期的なやりとりが可能かどうかを確認していたと考えられる。そのため、MNSには、「邪魔してごめんね」のような {連絡詫び} が見られたが、JNSには見られなかった。

「ちょっと聞きたい」という {前置き} は、MNSの5名に見られたが、JNSには見

表8 各意味公式の使用数

	意味公式	母語場面			接触場面		
		JNS (n=20)	MNS (n=20)	p 値	JNS (n=20)	MNS (n=20)	p 値
開始部	名前	13	20	0.008**	18	19	1.000
	挨拶	14	16	0.716	11	13	0.748
	近況伺い	4	5	1.000	7	7	1.000
	近況報告	1	3	0.605	3	3	1.000
	状況伺い	0	11	0.000**	0	1	1.000
	連絡詫び	0	4	0.106	2	0	0.487
	周辺話題	0	3	0.231	0	0	1.000
勧誘部	注目要求	3	1	0.605	2	1	1.000
	前置き	0	5	0.047*	0	0	1.000
	自分の非	3	1	0.605	4	4	1.000
	都合伺い	8	10	0.546	9	11	0.752
	明示的誘い	1	0	1.000	2	0	0.487
	話題提示	19	11	0.008**	19	16	0.342
	負担軽減	7	5	0.731	8	8	1.000
	共同行為要求	16	16	1.000	18	16	0.422
	再共同行為要求	2	3	1.000	2	1	1.000
	情報提供	11	13	0.748	14	6	0.026*
	その他	3	8	0.155	2	2	1.000

* $p < .05$ 、** $p < .01$

られなかった。この意味公式は、予告によりフェイス侵害度を緩和する予備的なストラテジーであろう。JNSも「依頼」の予告としては使うようだが（ティダー 2004）、「勧誘」を分析した本研究においては、JNSによる「前置き」は見られなかった。依頼による受益者は話し手であるのに対し、勧誘による受益者は話し手と聞き手の両方であるためだと思われるが、この点に関しては、さらなる検証が必要であろう。

「話題提示」の有意差に関しては、表3で示したように、マレー語には、「話題提示」と「共同行為要求」を接続助詞でつなぐ用法がないためだと考えられる。よって、MNSは、「前置き」や「都合伺い」等の他の意味公式を用いて、勧誘予告を行っていた（例：ahad depan, free tak? Nak ajak dtg rumah（今度の日曜、空いてる？うちに招待したいの））。

接触場面においては、「情報提供」の意味公式にのみ、JNSとMNSの2群間における有意差が見られ、上述の4つの意味公式における有意差はなくなっていた。MNSが目標言語の規範に合わせた結果、MNSによる「状況伺い」と「前置き」の使用数は減少し、「話題提示」の使用数は増加していた。他方、「名前」においてはJNSの使用数が母語場面よりも増えており、MNSの規範に近づいていた。

MNSによる「情報提供」の減少は、JSL特有の言語行動となっていた。この点について、より詳細に検証すべく、表9に、勧誘部全体を通して見られた、パーティーに関する詳細の言及内容とそれらの出現頻度をまとめた。

表9 詳細の言及内容と出現頻度

言及内容	母語場面		接触場面	
	JNS	MNS	JNS	MNS
目的	4	15	4	13
参加者	11	5	5	2
時間	3	7	4	3
料理	4	3	9	1
住所	0	1	0	1
服装	0	2	0	0
合計	22	33	22	20

母語場面の合計数を見ると、MNSがJNSよりも多く詳細に言及していることがわかる。言及内容の中でも、MNSはパーティーの開催目的について最も多く触れていた。目的15件のうち12件は誕生日パーティーとするもので、家族のお祝い事に友人も招待するという慣習がうかがわれた。一方、JNSは参加者に関する情報に最も多く言及していた。どんな人が来るのか、だれを連れてきてもいい

のかを知らせることで、参加の楽しみを増やしたり、気軽な参加を促したりしていた。

接触場面における合計数は、JNSとMNSの間に大きな違いはなかった。MNSは開催目的について最も多く言及しており、ここでも誕生日パーティーが典型的となっていた。一方のJNSは料理について最も多く言及しており、日本料理や和菓子等の用意について積極的に情報を発信し、MNSの興味を引こうとしていた。接触場面において、MNSによる「情報提供」はJNSより有意に少なかったが、詳細の出現頻度はさほど変わらなかった。これは、「今度の日曜日、娘の誕生日パーティーをやる予定なので」という発話に見られるように、MNSは「話題提示」の中で既に何らかの詳細に言及することが多かったためであろう（10/16件）。それに対して、JNSは、「日曜日にホームパーティーやるんだけど」のように、「話題提示」では大雑把な情報のみを提示する傾向が見られた（14/19件）。

なお、本研究の収集データにおいて、相手の断りやすさに配慮して、あえてマイナス情報を伝える行為は見られなかった。ホームパーティーの場合、日時や場所が勧誘者によって既に決定されていることから、仮に気が進まないという理由であっても、都合が悪いと言って断りやすいことが1つの要因だと思われる。

次に、表10は、「共同行為要求」における「文末絵記号類」及びスタンプの使用数を、JNSとMNSの2群間で比較した結果である。

母語場面を見ると、JNSは「？」（疑問符）を多用するのに対して、MNSは文末に何もつけない「なし」を選択することが最も多く、それぞれ有意差が見られた。表4で示したように、JNSでは、「どう？」「来ない？」「来れる？」といった「意向」「勧誘」「可能」の形式で誘う事例が8割を超えており（13/16件）、疑問形を用いて、結論を相手に委ねようとする配慮が見てとれる。一方のMNSにおいては、「誘いたい」

表 10 {共同行為要求} における「文末絵記号類」及びスタンプの使用数

	比較項目	母語場面			接触場面		
		JNS (n=20)	MNS (n=20)	p 値	JNS (n=20)	MNS (n=20)	p 値
文末絵記号類	なし	0	13	0.000**	1	7	0.044*
	。	1	2	1.000	1	1	1.000
	、	1	0	1.000	0	2	0.487
	?	12	1	0.000**	10	4	0.096
	!	0	0	1.000	1	0	1.000
	～	1	0	1.000	1	0	1.000
	ー	2	0	0.487	1	0	1.000
	絵文字	3	0	0.231	5	2	0.250
	顔文字	0	0	1.000	1	1	1.000
	スタンプ	3	0	0.231	4	2	0.423

* $p < .05$ 、** $p < .01$

という「願望」が多かったことから、「?」（疑問符）の使用は、「可能」の1件のみであった。また、平叙文では文レベルの細切れ送信を行い、吹き出しの送信により発話の終了を示す傾向が見られたため、「なし」が頻発していた（稗田 2022）。

接触場面においても、「文末絵記号類」を付さない「なし」を選択したMNSが多く、JNSとの間に有意差が見られた。MNSは、「来て」「誘いたい」といった「依頼」「願望」の形式が7割を超えており（12/16件）、「?」（疑問符）が必須ではない形式を用いて、ポジティブ・ポライトネスを強調したストラテジーが選択されていた。

そのほか、絵文字、顔文字、スタンプの使用数に2群間の有意差は見られなかったが、いたって明るい笑顔を用いていたJNSとは異なり、MNSの1名が、感情の理解がより複雑と思われる顔文字を使用していた（例：(￣▽￣*)ゞ）。なお、上述の非言語情報の使用に対して不快感を表明したJNSはいなかった。1文を途中で故意に送信する「文切り送信」の連続は、相手を混乱させる恐れが高まるが（稗田 2023b）、本稿の分析データにはそのような「文切り送信」はなく、「文末絵記号類」の「なし」は、JNSの許容範囲内に収まっていた。

次に、表11は、意味公式の一人平均使用数を、JNSとMNSの2群間で比較した結果を示している。

表 11 意味公式の一人平均使用数

	母語場面			接触場面		
	JNS	MNS	t 値	JNS	MNS	t 値
意味公式の一人平均使用数 (標準偏差)	5.50 (1.83)	7.10 (1.97)	2.30*	6.25 (1.76)	5.45 (1.77)	0.96

* $p < .05$ 、** $p < .01$

母語場面においては2群間に有意差が見られたが ($t(38)=2.30$, $p=.013$, $d=0.84$ (効果量大)), 接触場面では有意差が見られなかった ($t(38)=0.96$, $p=.171$, $d=0.45$ (効果量小))。この傾向は、勧誘談話の断り応答部を分析した稗田 (2023a) と同様の傾向を示している。事後インタビューでMNSは、「マレー人は本題以外の話もする」「急に話題に入るとちょっと相手がびっくりするかも」と述べていたが、同じJNSであっても、中国人はすぐに本題に入ろうとするのに対し (鎖 2012、李 2019)、MNSはJNS以上に開始部を長引かせようとしている点は対照的である。

接触場面では、MNSは意味公式の一人平均使用数を減少させており、目標言語の規範に沿って、主目的の達成をより重視し、短めのやりとりをしていることがわかった。

5. 考察

分析の結果、本研究の接触場面において、JNSが不快感を表明することはなく、情報のやりとりも、滞ることなく順調に行われていた。熊谷 (2000) は、言語行動の行い手は「当該の言語行動の目的を効果的に達成すること」と「相手との対人関係を良好に保つこと」の2つの指向性を常に合わせもっていると指摘しているが、MNSはこれら2つの指向性を満たすことに成功していたと言えよう。

社会言語能力の観点から見ると、MNSは友人とのやりとりで、普通体を基本的待遇レベルに設定し、親しみのある、自然なやりとりをしていた。また、MNSは「来てください」という、JNSとは異なる言語形式を用いることもあったが、待遇レベルアップシフトはJNSにも見られたものであり、相手から十分に受容されるものであった。そのほか、友人間における待遇レベルアップシフトは、より丁寧に感じられるだけで、とりわけ失礼にはならず、許容範囲内に収まった可能性が高いと思われる。

語用能力の観点から見ると、MNSは、目標言語の規範に合わせて、各意味公式の使用を柔軟に調整し、相手との快適なコミュニケーションを図っていた。MNSによる「情報提供」の使用が有意に少ないというJSL特有の特徴も見られたが、詳細の言及頻度は、JNSとMNSで同程度であり、JNSからの否定的なコメントはなかった。非言語情報の使用に関しても、「文末絵記号類」を用いない点においてMNSに語用論的転移が見られたが、JNSに不快感はなかった。これらをまとめると、MNSは、友人とのやりとりに必要十分な社会言語能力と語用能力を身につけていたと言えよう。

一方で、言語構造的な能力 (文法能力) の観点から見ると、特に「話題提示」における言語形式に誤用が散見された。この事例は、言語的な知識があっても、また、教室環境と自然環境を通してインプットを得ていても、習得が難しい文法項目が存在することを実証的に示していると言えよう。

そして、これらの文法的な誤用に対して、JNSからの訂正フィードバックが行われることはなかった。細田 (2003) が述べているように、会話参加者たちは通常、主要

シークエンスで行われている活動の意味理解に優先権を置いて会話を進めているためであろう。また、これらの誤用が、意味の伝達にあまり影響しない「ローカルエラー」であった点も、修正がなされなかった一因であろう。「目標言語では適切でない言語形式についての情報（否定証拠）は、インプットを得ているだけではなかなか得にくく、フィードバックによって得られる」という指摘があるが（奥野他 2021 p.64）、本稿の事例は、訂正フィードバックを得ることの難しさを示唆していると言えよう。

また、Han (2004) は、化石化を引き起こす要因の1つとして「コミュニケーションニーズの充足」を挙げている。本稿の事例は、社会言語能力と語用能力の向上によって「ニーズの充足」がなされた場合、それが「訂正フィードバックの欠如」という外的要因や、「注意不足」「エラーの不検出」等の内的要因を連動的に引き起こす可能性があることを示唆している点でも有益であろう。

本研究を通して、必要十分な社会言語能力と語用能力により、相手の機嫌を損ねることなく、タスクの遂行が可能となることがわかった。文法能力向上の必要性は個人によって異なるが、文法能力をさらに高めていくには、学習動機の維持が不可欠である。そのためには、遂行したタスクを客観的に見直す機会を適宜提供し、誤用に対する気づきを促していくことが重要であろう。

文法学習のために新たに活用できるのが、本研究で用いたSNSというコミュニケーションツールだと思われる。SNSには即時性、記録性の面での利点があり、オンラインを通した遠隔学習も可能である。学習者は自分自身の発話を視聴覚情報を通して、いつでも見直すことができる。教室環境においては、プロジェクターで大きく映し出せば、学習者同士でフィードバックし合うことも容易であろう。これらの機会により、JNNSのコミュニケーション言語能力が総合的により高まることが期待されよう。

6. まとめと今後の課題




本稿は、コミュニケーション言語能力の観点から、MNSによる勧誘行動の特徴と課題を明らかにしてきた。分析の結果、日本留学3年以上の経験をもつMNSは、社会言語能力と語用能力の面からは、友人間でのやりとりに必要な能力を身につけており、相手との友好的な関係を保ちつつ、勧誘の主目的を達成できていることがわかった。一方で、言語構造的能力の観点からは、文法面での誤用が散見された。これらから、知識やインプットが自動化に結びつくとは限らないことが実証的に示された。また、JNSからの訂正フィードバックが一切なかったことから、文法能力の向上を志す学習者には気づきを促す学習の機会が保障され続けることの重要性が示唆された。

本稿を通して、従来の単一的な視点からでは見落とされがちだった、複数の下位能力がコミュニケーションに及ぼす影響、及び、長期的な言語学習における課題を提示することができたと思われる。これらの知見は、第二言語教育に役立つほか、言語評

価研究や第二言語習得研究といった関連分野への応用も可能であろう。

今後の課題として、本研究における JNNS は元留学生に限られていたため、他の学習段階における実態や課題を明らかにしていくことが求められよう。また、本研究での場面設定は友人同士に制限されていたことから、上下関係や親疎関係等を考慮して新たなデータを収集し、論考を深めていく必要があるだろう。そして、SNS を新たな学習用ツールとして活用する言語教育実践を行い、その効果を検証すると同時に、対面コミュニケーションに対する有効性を明らかにすることも大切だと思われる。

注

- 1) Brown & Levinson (1987) が提唱した概念で、「ポジティブ・フェイス」は、他者に認められたい、受け入れられたいという欲求であり、「ネガティブ・フェイス」は、自分の領域や自由を侵害されたくないという欲求のことを指す (熊谷 2013)。
- 2) 日本語能力試験には産出能力の測定が含まれていない。また、職場で日本語を使用する MNS は 13 名 (65%)、友人と日本語を使用する MNS は 15 名 (75%) となっており、データ収集時における詳細なレベル測定に関しては、今後の課題としたい。
- 3) この方法には、前のロールプレイによる学習効果が生ずるという欠点がある。しかし、同一話者の母語と第二言語を同じ調査で比較できること、及び、限られた調査協力者から得られるデータを最大限に生かせることを考慮し、この方法を採用した。
- 4) 「日本語教育の参照枠」(文化審議会国語分科会 2021) では、それぞれ「言語能力」「社会言語能力」「言語運用能力」と訳されている。本稿では、各能力の記述がより詳細な JF スタンドードに従った。
- 5) 意味公式のコーディング作業は、筆者及び各言語の母語話者 1 名が行った。評定者間信頼性係数 (Cohen's Kappa) は、日本語が $\kappa = .944$ 、マレー語が $\kappa = .892$ であり、コーディングの信頼性が確認された ($\kappa > .70$)。
- 6) 待遇レベルシフトには、心的距離の調整や談話の展開標識の機能がある (三牧 2002)。
- 7) 「来て〜」の場合、「〜」と「絵文字」をそれぞれ「1」とカウントした。
- 8) オンライン上の統計分析プログラム「js-STAR XR+ release 1.9.7.j」を用いた。

参考文献

- 奥野由紀子・岩崎典子・小口悠紀子・小林明子・櫻井千穂・嶋ちはる・中石ゆうこ・渡部倫子 (2021) 『超基礎・第二言語習得研究 SLA』くろしお出版
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点—『行動の仕方』を形づくる諸要素について—」『日本語科学』7、95-113
- 熊谷智子 (2013) 「日本語の『謝罪』をめぐるフェイスワーク—言語行動の対照研究から—」『東京女子大学比較文化研究所紀要』74、21-36

- 国際交流基金（2017）『JF 日本語教育スタンダード【新版】 利用者のためのガイドブック』
独立行政法人国際交流基金
- 鎖妮（2012）「接触場面における勧誘談話の先行部の特徴—意味公式とポライトネスの観点から—」『指向：日本語学・日本語教育学論究』9、174-184
- 鄭在恩（2009）「日韓の勧誘ストラテジーについて」『言葉と文化』10、113-132
- ティダー、キィ（2004）「依頼しにくい場合の『依頼表現』」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』17、71-93
- 東條友美（2009）「日本語学習者の勧誘談話行動」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』218、87-103
- 中垣友江（2015）「日本語とスワヒリ語における『勧誘』会話の対照研究—二日後の夕食への勧誘の断り—」『スワヒリ&アフリカ研究』26、20-39
- 長谷川哲子（2002）「勧誘の談話における日本語学習者の発話の特徴」『立命館言語文化研究』14（3）、215-224
- 原沢伊都夫（2010）『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』スリーエーネットワーク
- 稗田奈津江（2022）「SNSを用いた勧誘談話における『形式面』の特徴—日本語母語話者とマレー語母語話者の比較—」『社会言語科学』24（2）、83-90
- 稗田奈津江（2023a）「勧誘の断り応答部におけるストラテジーの使用とその解釈—日本語母語話者とマレー語母語話者の比較—」『語用論研究』24、59-78
- 稗田奈津江（2023b）「SNSの『形式面』に見られる特徴とポライトネス効果—接触場面における勧誘談話に着目して—」『日本語教育』184、127-142
- 文化審議会国語分科会（2021）『日本語教育の参照枠報告』
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf
- 細田由利（2003）「非母語話者と母語話者の日常コミュニケーションにおける言語学習の成立」『社会言語科学』6（1）、89-98
- 三牧陽子（2002）「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における『社会的規範』と『個人のストラテジー』を中心に—」『社会言語科学』5（1）、56-74
- 李晨昕（2019）「中国人日本語学習者の誘いにおける談話展開—負担度による違いに着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』68、215-224
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Han, Z. (2004). *Fossilization in adult second language acquisition*. Multilingual Matters.